分枝 *branching*

http://branching.jp
branching-03
publish : 9.December 2012

切り抜きボロックさん（2012）ペンキ・ジェッツ・ボンドで下塗りしたシーツ、切り抜き、260×170cm

接木的パロディの可能性に就ひて

Biwa TAKAHASHI 1972～
たかはしびわ

美術の教科書に載せられし美術史の図は大抵、系統樹状のものとして描かれを。
パロディは、美術史に於ける本流なりて、派術発展の原動力なることは、前号分枝紙上にて「パロディ本質論」として既に述べたり。
すなはち、美術史系統樹に於ひて、或る枝よりさらに枝分れしたるは、先行作品の何らかの要素を受べし放なり、パロディしたる故なり。
また、遠き過去の美術作品を参照し制作さることも誠に多し。例へば、シュメール彫刻の様式を以て日本神話を彫刻したる中村直人の『草薙剣』等なり。

枝分れに対し、接木とても申すべきか。
或る種の美術史上の行止りと言へる様な作品、つまり枝分れも接木もされ難き作品は幾つも在り、そこに意図して参照に留まらぬ接木をしてみるは、美術発展の為に良き試み也（勿論、参照は立派なパロディ也）。
我が「切抜ボロックさん」なる作もまた、非参照的接木的パロディ也。
ボロックは自身にても行止りを感じ、重し技法に切抜を施す試みをしたるも遂に展開することは能ず、死後「カット・アウト」と称して、妻たるクラスナーの手に拠りて多少の加工を施されし後、発表されたり。
参照的パロディなれば、我がペンキンの形に切抜くといふ語もありしが、此度はその語は取らず、重し以外の全ての白地を切抜くといふ摩に出たり。
我が「切抜ボロックさん」は、ボロックの行止りを、ボロックに同平重しに切抜といふ技法を用ひてしかし同ぜぬ、更なる展開の一つの可能性を示すことを成したりと自負す。
伸び縮む枝に接木して新たな枝と成すことを得と自負するも也。

たかはしびわ Biwa Takahashi 画家 1972 年東京都生まれ　長野県在住
長野二紀会会員　日本ペンギン党党員
1997 武蔵野美術大学油絵学科卒業
2006.7～「週刊さくらい」にて「さくらいも美術探訪」隔週連載（2008 年 7 月から 4 週に一度の掲載）
2007　信濃毎日新聞朝刊夕刊連載イラスト担当
たかはしびわのページ http://takahashibiwa.web.fc2.com

反 1969 論 ロックの反復　其の二

Kazuya OSAME 1971～
納和也

狼病の日（桑田のライブ 2007）レッド・ツェペリン IV(ホ20) より

1969 年に起きたロック、ジャズ、現代音楽の奇跡は前回にも書いたが僕がとても興味深い部分としてそれ以後の実務としての音楽の反復である。ジャズはマイルスデイビスでのエレクトリックを取り入れた新たな音への探求、ジョンコルトレーンにおけるアフリカへの回帰、それに伴うフリージャズへの移行、オーネットコールマンに於けるフリージャズの提唱によってある意味アカデミックな方向性としてジャンルを超えたようでもジャズに帰結する音楽の進化、現代音楽はいかにその実験性によってファインアートとの関係を維持し交流を繰り返し、音の扱い方、聴き手の意識改革へ。

ではロックはどうか？それは前回に続いてレッドツェペリンを題材にしてみる。レッドツェペリンは 1969 年にそれらのムーブメントを様式美化したファーストアルバムを制作した。プレーンもピーターグラントという 5 人目のメンバーといって差し支えのない圧倒的のマフィアのボスのような方と共に一つの 1970 年代のビジョンを確立し、それによって以後のロックは芸術ではなく一つの労働形態、多大な収益を隠さないで反復する事によって他の音楽形態とは異なる形で実現しそれが音楽そのものの進化とは無縁の形で生き延びて来た。まず大きく他の音楽形態と異なる点として重要なのは極限まで電気によって増幅された音によってミキシングの細かい設定も確立をしていなかったその時代、もちろんメンバーもモニタリングもなしで大音量の音の中でジャズのようにインプロビゼーションを行うのではなくその公演場所の設備の違いによって意図的ではなく偶然なる事の現界の中で演奏を毎晩のように苦悩していた。前の日の演奏と本日の演奏の違いは分析出来るとしたらその公演会場の設備を洗い出す事しか出来ない。

演奏の発展、新しい音楽への追及はせずに同じ曲を密集件の中繰り返して演奏していた。演奏の進化はまるでなく只々演奏し大音響の中で演奏者、聴衆は前後不覚になりその繰り返し方句晩続き、メンバーはそこで得られた利益でクスリ、酒を飲みよりライブでのコントロール不能の大音響での演奏に臨みその臨界点、そこら進化もしない音楽、それがロックの特性ではないか？大音響の中で音は日によってその条件によって演奏ミスをインプロビゼーションと捉えてロックの進化というのはナンセンスであった。ロバートプラント、ジョンポールジョーンズ以外のジミーペイジ、ジョンボーナムはそのそれ以上発展の余地もない押し寄せる快楽と労務の厭しさによって崩壊してゆく。ジミーペイジはジョンボーナムの死の後偏執狂とも云える執念でレッドツェペリン消滅後もレッドツェペリンに執着していた。

ジミーペイジは自分の演奏のコレクターに変貌して行き世界的に有名なプートレグの殿堂、西新宿を徘徊しレッドツェペリン、ファーム、ソロのプートレグを回収して回り西新宿の各店舗から恐れられる存在となる。自分の演奏をプートレグによって研究している。これは噂レベルの話だが自分で所蔵している音源をプートレグ用に裏でプートレグメーカーに納品しているといった話もある。実際去年私、西新宿に行ったところサウンドボードで再発されたプートレグが多数販売されていた。とても怪しい事である。公式に 2003 年に発売された LED ZEPPELIN DVD には一部プートレグが使われている。あとこれは余談だがジミーペイジの顔は日本人にとてもよく似ている。だから西新宿を徘徊しても誰も気付かないかもしれない。その後満を持して 2007 年についにレッドツェペリンは再始動を始める。問題のドラムスであるがジョンボーナムの息子であるジェイソンボーナムが担当、ボーカルのロバートプラントもソロボーカリストとして多様な成長をしている中での再結成は微妙であっただろう。再びジミーペイジの操り人形になる恐怖は相当なものと予測される。ベースのジョンポールジョーンズ、そしてジミーペイジは調子が良く往年用よりもギターが上手くなっている。動きも見た目の変貌（見れば分かる）とは裏腹に当時と変わらずイキイキしている。そのまますツアーをやろうとジミーペイジは考えていたらしかがボーカルのロバートプラントが難色を示しツアーは実行出来なかった。そこでやむ千利益重視のジミーペイジは DVD と音源の CD とリハーサル DVD（もちろんBluelay も選べる）セットにて 2012 年の 11 月 20 日に公式発売された。基本的にジミーペイジ自身が一番のマニアであるためにようなマニアックな形態、またお金が欲しいのかセットでしか買えないようになっている。中は繰り返すがジミーペイジのギターが上達している（これはある意味笑える）。ただこの世に存在しないジョンボーナムの圧倒的なドラムスの地鳴がある種の限界を示している。しかし 1968 年から 1977 年のライブはジョンボーナムのドラムが凄すぎるのでジミーペイジも自分の演奏ではなくこの地鳴に身を任せすぎたのではないかと多数の自分の演奏のプートレグを聴いて遅すぎるが本人が気づいたのではないかと予想出来る。同じ事しか出来ないが正確に演奏する事によってギターとベースがバンドの音を先導しドラムとボーカルは後を追いかけている様な音である。これは往年のアートレグを聴かないと気付かないかもしれないがバンドの形態は再結成にて変貌している点か。由自体もレコードとあまり変わらない演奏である。シラフのジミーペイジはケチで金の魅力に取りつかれた大いなるナルシストであるジミーリアを正確に再現できれば もっぱら事なしであろう。

最後に忘れてならない事はジミーペイジにとってロックとは労働でありいくら儲かるかが重要なのである。往年期の黒魔術も 2007 年には無かったことのように健康的である。もっとも芸術性が高いメンバーはもうこの世に居ないジョンボーナムである。それを逢まうとも良く分かっているのはプートレグをコレクトしているマニア、あとはもちろんジミーペイジである。

納和也 Kazuya Osame
クリエイター 1971 年埼玉県熊谷市（旧東沼町）生まれ
長野市長野綿在住
パエイカウケイ 企画・取材担当
クマサ計画取材補佐
アートディレクター
osamekazuya@baeikaikei.com

響ラ神ゲテ - Depression Devote - exhibition
2012 年 12 月 19:20,21,22 日
9:00 ～18:00
於：ギャラリー花蘇
〒 380-0831 長野市東町 147 phone:026-232-2324

ピオリア

Chika MATSUDA 1983～
松田联佳

Peoria : photo by Chika MATSUDA

機内告三食すっかり叶き出して、すっきり晴れやかに降り立ったシカゴ・オヘア空港はどんより曇り空。
ここで合っているのか分からないバス停で待つ。同じく確信のなさそうな人が数人同じ場所で待っているというのは心強いのどうか。５分、１０分過わてバスが来た。ここでよかった様子。一安心してバスに乗り込む。みんな乗り終わって、さて出発、と思ったら女の子がもう一人、ばたばたと乗り込んできた。携帯電話片手に申謂語でしゃべっている。電話を切ったと思ったら「あと５分待って、友達がくるんです！」と運転手に頼み始めた。「このバスはもう遅れているんだ、待ってられないよ！」と怒鳴る運転手。「あと３分だけ、お願いです！」と泣きそうな女の子。「だめだ、だめだ、早く座席に座れ！」「１分でもいいから、お願い！彼、お金がないの！」ドアは開まりバスが出発した。渋々そのこは席に着く。そして再びひたち上がり運転席へ「私、降ります。止まって！バスを止めて！」バスは空港から出て国道に出る手前。「バスは動いてるんだ！危ないから乗ってろ！」「お願い、彼は一銭も持っていないのよ！下ろして！」あっけなく、バスはなの子にハイジャックされ空港に逆戻り、同じバス停へ。バスが止まりドアが開く。女の子は携帯でなにかしゃべっている。「いま友達がこっちに向かっています、あと３分で着くから！」運転手も乗客も諦めた。数分後、その友達が乗り込んでバスは再び発車する。やれやれ、と乗客全員がふと他で下ろしたのも束の間、運転手の携帯電話が鳴る。バス会社からの様子。電話を切って車内アナウンス「別のバスが満員で乗れない人が出ているからもう一つの空港へ寄ってそいつらをピックアップしてから終点に向かう」とのこと。別に１時間ぐらい遅れることはかまわない、というのも実は私が家を最初に出発してから既に２週間が経っているのだ。

これまで何度か学生ビザなどで長期滞在することが多かったので、毎回入国審査というのは書類の不備があるのではないかという心配がつきまとった。ただ、今回は３ヶ月の滞在。短期旅行者、観光なことが起きるはずがない、オンラインで簡単にビザの申請をして、何の心配も不安もなく成田空港へ向かった。チェックインカウンター。私の前はこれから１０時間の機内での時間つぶしのことを考えるのに忙しかった。「このパスポートは自動読み取りバーコードがないので別にビザが必要です。今日のフライトには乗れません」想定外の出来事は起こるよう。唇夜、別れを惜しんだ家族と友人の住む家に翌日帰るのも気が引ける。東京の友人宅に一泊させてもらい、ネットでビザの申請を始める。どう考えても手続きに 10 日はかかるようす。ばずかしいけど家に帰るか。もう部屋も片付けた、必要な人に別れも告げた。この場所で私の役割はもう無いのだ。ぼんやりと、執行日を延期された死刑囚の気持ちを思い浮かべてみた。その場所からいなくなる覚悟が整った。その後に与えられる猶予。新たな執行日は伝えられていないため、それが明日なのか来月なのか、もしくは来ないのか、見当がつかない。捉の門前。成田空港チェックインカウンター。国境というのは簡単に超えられてはいけない境界のようだ。

結局バスは遅滞２時間のところ３時間半で到着。ピオリア。
住居は郊外の一軒家。数人の作家との共同生活。アトリエは工場地帯にある古いレンガ造りの工場を改修した建物。隣接してエタノール生産工場があるため、辺り一帯はウイスキーの匂いが立ちこめている。滞在中、このアトリエに毎日送り迎えしてくれるスタッフがいて９時～６時、月～日曜日というスケジュールで規則正しく制作する。タイムカードに出勤、退出時間を記入し時給制労働者のようにアトリエに通う。片手間にアーティストなんてやっていられない。私たちは一日８時間、週７日働いているのだ。その間、制作しようが昼寝をしていようが誰も文句は言わないのだが。到着して数日、まだ暖かいと自分がどのような場所にいるのか知る為にも自転車で近所を散策。アトリエの前はワシントン通り。そういえば半年程前、この アーティストレジデンスが決まった頃、私はワシントンに行くものだと思っていた。友人にワシントン州？ワシントン DC ？と聞かれ、ワシントン州だと思う、と根拠無く答えた。この２つは地図上だとアメリカ大陸の西端と東端で距離にすると２500 マイルほど離れているらしい。車で１週間くらいかな。目にちが近づき、飛行機のチケットを取ったりする頃になってようやくそれがイリノイ州、ピオリア、ワシントン通りであることに気がついた。その３つのワシントンはどれも私にとっては平等に見知らぬ土地だった。そのときは 行き場所あることに安心していて、その場所がどこにあろうと差し当たって重要ではなかった。自分と対象の距離は、距離であるだけで遠くもなく近くもなく、そのぶんだけそこにある。目と鼻の先がいつまで待っても縮まらないようなものだな、と思う。

ワシントン通りに立ち並んでいるのはレンガ造りの古い工場で、その半分以上は廃屋。キャタピラーという大手重機メーカーの拠点があるため市の経済は潤っている、と言うわりに見かけはゴーストタウン。初日に お気に入りの中古品屋をみつける。絵入れ箱の店主はお初めダイナと思ったが、それはこの辺の人々の渡りという訪ち方なのだということに何日かして気づいた。初日に、今週末で閉店するかもしれない、と告げられ、その夜何日遅った為に、この店で作品作りに必要な材料と道具はほとんど揃った。1950 年代製造の足踏マッサージ機、３ドル。探したこともないが、見つけたときに、これはどに探していたものは無い、と思うものがこういう店にはある。結局店は月末に移転が決まったらしく、最初の週のように値引きはしてくれなくなった。

ピオリアでの経験の作品「言葉以前の記憶」は舌が延ばたテープをこの店で 50 セントで買った カセットテープデッキが巻き取って行く。

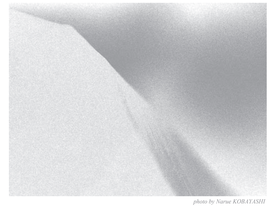

photo by Naruo KOBAYASHI

時間と距離と気持ち

Naruo KOBAYASHI 1984～
小林愛枝

電車で松本へ行った。普段は車だが、駅前から駅前の移動ということもあり、電車を利用することにした。特急ではなく普通電車を選択。もしかしたら時めて乗るかもしれない。仮にあったとしても、記憶が無い。

片道１時間半。新幹線を利用すれば東京まで行くことができる時間である。ゆっくり走る電車の中で、のんびり考え事をしたり、本を読んだり、ぼんやり景色を眺めたり。穏やかな日差しと鮮やかな紅葉。何だかとても贅沢な時間。もっと乗っていたいと願う。

回じ１時間半でも東京までの時間は何だか気忙しい。新幹線の中では、気分が悪くなるので 10 分以上本を読むことができない。眺める景色も速すぎてよくわからない。早く着かないかなと乗るたびに思う。

速度と気持ちは比例しているかもしれない。
速いのは便利だけど、色々疲れる。
たまにはゆっくりと。

小林愛枝 Narue Kobayashi
1984 年生まれ 長野県長野市在住
http://narukobayashi.com/

これから・・・

Kazuyoshi YASUHIRA 1970～
安達忠厚

未曾有の大震災から次は一年を迎える。
東北出身の私にとって完全に他人事ではなかった。
本気で自分にできることは何か考えた。
【夢や希望を実現するために夢みはじめる】
まず、自分が動き出すことでまこから確実に
【一つ】【そして】【ずっと】が動き出す。
「カフェを経営するのが夢だった」
なんでもいいと思う。
失敗を恐れず、動きはじめること。
これが、これからの合理的な後輩に向けた
社会貢献のひとつではないだろうか。

安達忠厚 Kodai ADACHI
1977 年 長野県松本市生まれ 長野県長野市在住
2007 年 長野市長野ビルヂングにてアトリエ開設
現代小説執筆開始 長野市長野ビルヂング Room_ID:a
2009 年 長野市長野ビルヂングにてアトリエ閉鎖
新潟県マウントピリカスにてアトリエ開設
2011 年 長野市長野ビルヂングにてアトリエ再開
ロゴ：http://www.cubbar.roger.biz

謬愛の地

Tetsuya MACHIDA 1958～
町田哲也

牛芳の根を銜え横腹の痛みを訴える男は二つ谷向こうに下った山崖に手のひらの格好で浮く蹤地の小さな集落縁に在る倹しい家に残した妻が朝方子供の頬を平手で打ったと思いだし嘴を吐きめの引い清跡に近づくと犬の岩に紐を繋げる。痙攣を耐ろ犬はかさく歯笑を捻り唆ったが男の手で頭を小突かれ地に尾と顎を伏す。大きな者に吹かれて流れ去った白霧が残した朝露に濡れた犬の腹を撫た指を舐め男はまた牛芳をしゃぶる。つま先で喚い込まれた水の形を残す地を掘れば濡れたものが見える。雪解けから初夏迄降れ水を張る洲潤は水が地に喚い込まれてからまだ然程時が過ぎていない。

夢をみなかった愛嬢の男は老いた親たちの寝える布団の膨らみを仰のさきに一瞥しいつもより早く静かに寝床を抜け濃霧の薄闇を夜才時刻から中直を絞って腦で大人しく朝飯を待つ老犬にすまんなと声をかけつつ沿輪をつける。ぢ い が犬を連れて行けば喝みなう。残飯に湯気立つ鼎を注いだ器に鼻先を突っ込んで飯を食う若いた根の背に手を乗せて視界の晴れない森に入るので一緒に行くかと声をかけた。朝霧は季節が出鱈目に入れ替わる倒錯を示し時の逆さまを思わせる。峰を見上げた底気の樹の先も白く滑れる様なく上下わからずひんやり何時のものかわからぬ冷気だけが居座に降りつつ、濃れた地の奥に矣った小さな後ろ姿が晩度も白煙の先へ走っていく。

牛芳を銜える男と隻眼の男は二十日ほど前の祭りの夜にこの日の約束をしていたが、落ち合う場所とした洲潤は早に彼らの離れた住処の中央に位置していたばかりではなく、どちらともなく彼処を示し示された時に即座に了才場所の理解と、洲潤の凹みの森の穴の特異な清潔が誰にも邪魔されない頭圭を促した。噂を聞いてふたりの男は祭りの夜この地に根を張った谷や高地の女たちとは異なった媚てられている軽く明るい巫女のような銅鑼を叩後に纏う町から来た紅葉を陶然とみつめて口を開けたまま鍛冶石わせ隻眼の踊んだひとつきりの赤眼りのような目玉に映り込んだ牛芳を銜える男自身の地鍛を認め、一度は地に落とした牛芳を拾って泥を拭いもせずに再び銜えた谷間の銅鑼の瓦礫南の男根を自らの中に銜るものと違い無しと隻眼の男は受け止めていた。ケラケラ笑う紅葉はたなから投げられる噂のあれこれを「かもしれぬ」などと言いながら踊を盗編な受けたが酔って倒れずに延々と子から老人までのみつめを吸い取り時折周縁から冷たく注ぐ地の女たちの斜視にけりて屋を解きカマイタチの目を盗すこと無く返した。数の知れたこの地では勝気で奔放な浮遊の存在に男どもは等しく好奇をなたちは嫉みを含んだ蔑みを稔く。

あれからみたた。老犬を知い紐の先に従えた隻眼の男に向けて其処に止まれという意味の発声で牛芳を口の端に寄せた男は再び咥り始め銜を張り前足を浮かせた犬を手首の返しで戒めてひとつ言葉を漬く。十日ほど前に乳をくれた者が産と親は草を喰っていたので母親が乳を渡した。どうやら社が脳の茶屋で飯盛りの手伝いをはじめたらしい。熱り立つ獣など眼に入らぬような老犬は隻眼の足元に蹲り足りなかった眼りの続きをはじめその寄せられた腹が男の足首を温める。牛芳を噛み砕いて吐き捨て胸から男の牛芳の根を取り出し前演の隙間に銜え込み男は左眼に横れ朽ちた樹に手鍛を嵌り付け足の先で迄だ咬る犬の尻をかさく蹴ってから数歩動いて木株ほどの石の上に座し煙草はあるかと尋ねる。お前は嫁も子もある。紅葉は俺の妻にする。残り少ない凹んだ煙草の箱こと揺れる牛芳に向けて投げると隻眼の男は首を返し尻をずと老犬の首に手を置く。洲潤から迫り上がる途中で背後から座した老犬に元で火をつけた牛芳男がお前ではは無理だと煙草の煙と言葉を同時に吐く声が投げられ隻眼の男は一度振り返ったが再び踵を帰り道に返る老犬の歩みに促されるまま進む。座ったまま牛芳を煙草と間違えて吹かした男はちっと唇を噛んで麦の癒も片目の生意気もこれと同じでいつか消えると横腹の疼きに指を差し込んだ。

紅葉は手伝いをはじめた二日目に茶屋の激彼岡わず嫌はずず嘴り続ける老いた主に斉ばれれの裏では町からの使いの若い男のされるままに身を預け遠方より訪ったまたちへ料理を運びながら揺れから潤んだ余計を目元に湿めて節操無く与えていたが、この城の周囲とふたりの差別的な奇異を突き刺すような眼差しに日々不快を募らせる。しかし同時に町中の高慢な自意識ばかりの軟弱な男どもに脆弱に辟易していたの で祭りの夜に姿を眺めた地の森や高地や谷で身体を蠢かず男らの強靭な銜の揺れ動くカタチはいつまでも残り早々に何処かへ変転しようとは思わなかった。幼少から転々と見知らぬ大人に預けられ虐げられた自らが清明な生物であるはずがないと考えていた紅葉は時折町へ降りては余計を買い込み戻って茶屋の主をたらし込み物売りの店を持ちたいと囁くのを忘れなかった。あの化粧は遠くの枝でありどこかに追われている男だと頭の中で寄り添う女たちが風評をこしらえた夜の晩酌で話題となっても男たちのほうがまあいいじゃないか勢諂客に評判が良いじゃないかと紅葉を揺護する。

馬が欲しいわけとも手にはいるのかしら。手のひらを額にあてて牧舎を仰ぎながら紅葉ははじめて隻眼の男の前に立ちまだ温かい乳の入った器を片手で胸に抱いていた。隻眼の男は馬のことにはぶえ?鐵鬼の項年の世話をしている時に後ろ足で蹴られて片目を失い両親の手伝いをしている と一緒に勝手に喋り、それをみた紅葉は口に手を添て笑っていたが、ふたりの親は目を離し独り で流れに足を浸らせてした馬は数頭あるが父親にきいてみる嘱にならないなかと不眠を小さく加える。紅葉は軒余曲折のない男の実直な現を瞬きもせず目の前に突き出されたことに動転し小姐のように顔を赤らめてから、お父様に馬のことを聞いてくださいねと烏打言って走りだった。この時紅葉の空虚に開かれた胸に広 隻眼男の臓胴が使り込められたのかもしれなかった。

山襞の起伏を贅沢のごわめきの波が晩度も寄せた後祝儀が行われた隻眼の男は紅葉を喝にした。牛芳男は半ば貶すような強引さで野道の縁と夜の社で紅葉を押し倒した。一度目の紅葉は牛芳をしゃぶる横鬼をみつめ下し女獣の傍らに幼少時遊ぶ為に寄せ離別した地の誕生みれの口元を浮かばせて微笑みみを開く。二度目の中途で祭りの夜の絢爛が剥がれ落ち獣からヒトに変わった女の様子に気づき怒令を放し背を丸めて立くなを眺めて谷間の家へ絞り 三人分の厠残半ら付横で子を壁に抱いた妻に酌をさせ盃物が落ちたかと酒を煽ったその夜小さな妻と長々と交じった。茶屋の主は家内も認めた妾であった苦の女が牧人の嫁になっても言うことを聞くだろうと電線た頭で高を括ってべらべらと喋り続けていたが、隻眼男の横で世話になりましたと頭を下げられてから使い女だとして紅葉は茶屋に足を運ぶことはなかった。祝儀がどこか静寂に支配された奇妙なものであったのは新郎が新婚の閨酒を全て堪え込んでいたからだと地のなたちは頷き合い、ヒトツメには女がみえないと酒の席で野次った主の茶屋から客の姿が消えた。馬は嫁入り前に父親の許しを得て紅葉に与えられカブと名付けられた所に乗って隻眼の所へ乳をもらいに行く紅葉の姿が雪隠る前ひとつの季節度な地の男父に眺められ通うほどに人が変わると囁かれた。馬のおれと紅葉はきいた親たちに飯をこしら え時折牧舎の手伝いもはじめた。紅葉は幾度か隻眼の男に自身のこれまでの成れの全てをひとつ残らず打ち明けて預けたいと言い寄ったが隻眼の水滴の目玉の透明は何も言わなくてもよいとよいおよ深く遠き遥るばかりであり、それでもひとつきりのその水滴が自分に注がれればそれぞれ ている 隻の中に落ちた広がって自身の軸を洗い流すと紅葉は信じた。だが隻眼の透明は実は片目眼帯に隠された潰れた眉間の底の白濁の中のハさな黒点のように消えない喪失にまだ支えられており黙したまま紅葉の腹を撫で潰れとヒトツメの何処か遠い中央にぽつんと浮かぶ窟静のような寛容が紅葉への潜愛のかたちと知る。

水のまだ残る洲潤の中央に牛芳を銜えた男がやはり唆る犬を横えるように従えた男子供と連れ立ち以前よりも近づいた場所に隻眼の男とその妻である紅葉がまたまたばかりの子を抱み抱きやはり半ば眼りの中にいる蹴った老犬には言葉をなどない。どれほどの時間が過ぎたか彼ら自身よくわからない。二度の祭りの夜彼らの姿はなかった。牛芳を銜え男は犬の重さに耐えきれない子供の拳の大結を杓ちた樹木に縛り付けて近寄り両手を差し出す と紅葉は赤子を平芳を銜え男に抱かせるのだった。口元の牛芳に手を伸ばした赤子のさせるまま の牛芳男の半眼の瞼の奥に隻眼の水滴に似た水の音が聞こえるふたりと離れた水際の老犬の眼りを真っすぐにみつめる男子供の頭を撫で紅葉は思った。赤子を紅葉に尻してから背負い袋から取り出した煎肉の包みを隻眼の男に差し出した牛芳男は、倚を左らせて ズっと牛芳を吹き飛ばし今度一緒に狩りにでるかと口元を指のた る。洲潤の水は彼らの足首を隠すほどにやや増えたが彼らは気にもせず樹々のようにいつまでも風に揺れている。

町田哲也 Tetsuya Machida 1958 年長野市生まれ
プランテング企画責任 トポスM会員 バエイカウケイ関係統括 クマサ計画主催
iam@machidatetsuya.com
校閲／樹 http://edanokutoki.com/data/
individual web contents map http://tokisae.com/map/
http://machidatetsuya.com
iam@machidatetsuya.com

マリオネットオペラ

Akiko TOKUTAKE 1955～
徳武安紀子

マリオネットオペラ「カルメン」2012 年 10 月講演　ホクト文化会館

自分は、いったい何をやりたいのだろう？
と思うことがある。

私は今、仕事の合間をぬって「マリオネットオペラ」をやっています。オペラの物語をマリオネットで演じ、その場その場に音楽を織りまぜる。
ミュージカルのように、せりふから続いて歌や演奏になる時、とても興奮します。
昔々の人々は、きっと思いのたけを語っているうちに自然とそれは、詩となり歌となり踊りになったんだろうな・・・・・と。

そもそもの始めのきっかけを書きます。
子供のころ、学校で音楽の時間に先生がレコードをかけてくれた。
「この世に、こんなきれいな曲があるのか ?!」とおどろいた。すごく感動した。
ベールギュント組曲の中の「朝」だった。
同じく「オーセの死」をかけた後に先生が、「これは不良になった息子が、放浪の末帰ってきて、母が死の床に横 ている中の曲だ」といった。
又又、私はびっくりした。
「クラシックの曲に物語があるんなん!?」
全部を知りたかったけど、先生に聞く勇気はなかった。
高校の時、音楽の先生から貰っていた音楽雑誌に、ある時ベールギュントの話が出ていた。
私はそれから、何度も何度も頭の中でシーンの組み立てと登場人物のシュミレーションをした。
ベールギュントは私の特別な物語になった。

実際に舞台にのせたのは、町の文化祭で中学の演劇部の子供と、近所の主婦をむりやりかき集めて作った音楽隊でやりました。
私は、回り舞台の制作に、演出に、と走りまわった。一週間と一ヶ月の感覚がわからなくなるほど、混乱と不安の日々だったが、ぶっつけ本番はしかし、なかなか好評だった。
が、もっとちゃんとやりたくて、それとヨーロッパのピクニックコンサートをやりたくて、7-8 年後の企画をもって、市内の音楽事務所をたずねました。
「スコアを輸入して、オーケストラを派遣して、ベールギュントを組んで、舞台美術を発注して、、、ｅｔｃ　ざっと見積もって 700 万円は最低でもかかりますね」

そこで、私は縋小することを考えた。
オーケストラのかわりに知り合いの"音楽のできるプロ・アマの演奏家"、オペラ歌手のかわりに "あやつり人形" を、と。
私の中で、一番小さくした型だた。

やってみたらこれはすごふ具合がいい。
舞台が小さいから何でもできる。（考えていたことの半分もできなかったが）
700 万円かかるところ、まわりの皆の協力と寄付金 10 万円ちょっとで、200 人の観客を熱狂させた。――これは本当です。私の自慢です。――
これは大変な自信になる、実績になる、ステップアップして続けて大きくできる、と信じていた。
が、現実はそーではなかった。
なぜか・・・・？
それを書くには例気がいる。私には才能も、実力も、積み重ねた努力も、人望もなかった。
ひらめきがあっただけ。
でも、それも、これも、わかった上で、はいつくばるような思いで次の年、「くるみ割り人形」を成功させた。そして・・・今も・・・まだやっている、失敗の山を築きながら。

わたしは、なぜやっているのだろう・・・？
音楽でも、絵でも、話でも、映像でも目に耳に飛びこんできたものに、・・・ン？！と思うと、そしてそれが偶然に、必然に重なると、いきなりひらめく !! 思いが、想像が、むくむくと広がる。この瞬間がものすごく楽しい。
自分の現実は見なかったことにして、唐突に声をかける。
「ーーやらないか？」
あーまた言ってしまった。

町田哲也氏の作品ともちらしを見て又ひらめいた！
－ピノキオ ?!－
今夏のコンサートで、ただ「表紙が青い」というだけで小道具に使ったあの「ピノキオ」だった。
カニンゲベーベーをはさみながら拾い読むと、ディズニーではないピノキオ。
ドキッとするほど暗いシーンもあった。
何かが心の中でゴソッと動いた。
誰にでもあること、珍しくもない。
でも・・・・・
そして、再び「ピノキオ」がやってきた。
このあいだの "ゴソッ" が "ゴロリ" と動いた。

今度会ったら言ってしまいそうだ。
「ピノキオとマリンパやらない？」
何ができるだろう？と思うとやけに楽しい。
背景画けでなく、造形、映像、他広く自由な舞台美術に興味のあるかた呼掛しながら楽しみながら一緒にやりましょう。

－－－－－－－＊－－－－－－－＊－－－－－－－＊－－－－－－－＊－－－

2013 年以降、いいづな山妖精協会主催コンサートの予定

○ギリシャ神話星座のコンサート（仮名）
○一人マリオネット　「私たちのそして私が愛したヨハネス・ブラームス」（仮名）
ｂｙクララシューマン
○マリオネットシアター「真夏の夜の夢」(メンデルスゾーン)
○一人マリオネット　「くるみ割り人形」（チャイコフスキー）
～クリスマスイブに妹におこった ふしぎな話～　ｂｙフリッツ・シュタールバーム
○マリオネットオペラ「ベールギュント」(グリーク)
○マリオネットオペラ「椿姫」(ヴ゛ェルディ)

徳武安紀子 Akiko Tokutake 1955 生まれ
明治学院大学文学部図書館司書 無職 30 才で脳梗塞に私語
料理店アリフレーッシュ調理現在にいたる
劇団音体義成所で演劇を学ぶ。劇団「民衆舞台」入団。象山正一氏に師事
在籍中に山本安英の会の「夕鶴」に同行、全国をめぐる
1999 年音楽劇「ベールギュント」習常劇団劇「邪天」の開本。演出を手がける
2000 年から飯綱町図書の「お話の会」で語み聞かせに参加
同会で「不思議の国のお話はおもちゃ」作、演出、出演
2004 年「マリオネットオペレッタ「ベールギュント」」初演
その後も様々人形とさまざまな楽器、声楽、時としてパレエなどとのコラボで
「くるみ割り人形」「椿々夫人」「カルメン」を上演。現在に至る
飯綱町在住
夫とともにレストラン「アリコ・ルージュ」経営
欧風家庭料理アリコ・ルージュ http://homepage3.nifty.com/haricot/
電話 026-253-7551
haricot.-rouge@nifty.com

NY 通信　Vol.1

Akiko YAMAGAMI 1984～
山上晃葉

ビンとくるとはどういう瞬間なんだろうか？

なんだか NY にきて１週間になるがいっこうにビンと来ない。
Facebook や SNS が使えるということはその感覚をどこか遠くに落としてきてしまうことなんだと思う。
かといってそれら を捨てたところでそれがいいとも言い切れない。
まぁ、しばらく時代をさかのぼり電話とテキストメールでコミュニケーションするのもいいかなと思っている今日この頃。
(普通に家に帰ると使えるのですが…)

「サイクル」

どこにいようとも嫌応もなく私は私で、世界は勝手に回っている。
日本をでることが望ましいことだ。
日本をでたからといって私が私でなくなるなんてこともないし、突然変わるということもない。
しかし、社会と関わりを強く意識することは確かだ。
その国との、そして自分の国との関わりは変わるように思う。
もの を一言ラ にしても、人に会うにしても その一つ一つが自分の頭の中をかき回す。
私の中にある概念は本当にそれでいいのか！？
と、常に自分に問うように なる。
ただただ究極を交わしただけで嬉しくなったり、無性に悲しくなったり、自分の感情の概念も大きく敏感になる。
感情と肉体は一つなんだと自分の身で体感する。
何かを動かし続けること。
頭を身体を感情を環境を。
動かし続けることが何かにつながっていくのだと思う。

２０１２・１１・２２

山上晃葉　Akiha Yamakami
1984 年長野市生まれ　NY:Brooklyn 在住
美術作家
身体を毛チーフに版画や布を用いて立体作品を制作。
国内外で発表を重ね、数年前よりダンスとのコラボレーションを始める。
自らの作品を" ソフトスカルプチャー＋柔らかい風景 " と呼び、ダンサーの衣装なども手がける。
2009 年多摩美術大学大学院絵画専攻版画研究領域修了
http://akihayamakami.com/

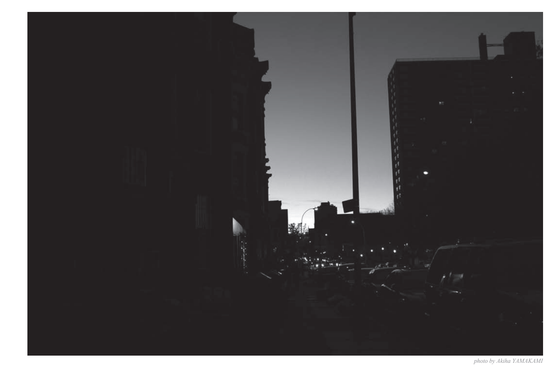

photo by Akiha YAMAGAMI

絵巻り 測量から出ると決めた 油彩 / 紙筆 / キャンバス 46x46cm

戒道巡りを終えて

Tomoro KAWAI 1976～
川合朗郎

長野駅のコインロッカーに預ければよいものを世話になる町田さん や梅田さん、図書館の人達へのお土産と大きなリュックを担いだまま善光寺へ向けて歩き出した。少し行くと道の左手に道祖神を見つけたので今回の旅の無事を祈る。
途中ノ ザキカメラ店とカメラのヤマモトに立ち寄り、更にぶらぶらと歩いて行くと程なく善光寺に辿り 着いた。
前日に東京のギャラリーでお会いした中村さんから善光寺の歩き方を伝授されていたので迷わず仁王門の裏側に回り込み隠れた彫刻を観賞する。大黒・弁財・毘沙門の三つの顔を持つ三面大黒天は本当に奇怪であった。仁王像と同じ高村光雲と米原雲海の師弟合作であるとのこと。
もう一つの目的である善光寺名物お戒道巡りをしようと本堂に入ると大人５００円だという。極楽浄土行きが約束されるのだから安い。
靴を脱いでビニール袋に入れて持たされるので更に荷物が増えてしまった。
両手提げ袋にリュックで戒道巡りをしている人は他に居ない。
泣源する踏襲道の列に混じって階段を下って行くと少し歩いただけで真ら暗闇に出たまた。入り口の立て札には「右側の壁の腰の辺りを触りながら進め」の教えを読まなかったのだろう、左の闇から「こりゃなんにも見えないよ～」という騒冠な婆さんの声が聞こえる。連れの爺さんが「鼠目だヨねの壁を触りながら進まないと～」と言っている。
まったくなにも見えないけれど踏襲の列が泣源していることは分かる。
ときどき前方に行く婆さんの足を蹴ったり自覚もしきゴヲゴワした髪質に触れてしまったりする。「あ、すみません。」と言うが特に返事は無い。
相変わらず私の後ろをぴったりと離れる くぼんだ目玉の「人さだ 3 前の兄さんのリックの紐を持ってるから」という爺の声がする。どうやら私のリュックのヒモを掴りと連んでいるようだ。
なんだかゑ当にあの世に向かって